The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はじめに
Author(s)	木村, 茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2013, 2012, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77380
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

1．報告書の刊行に際して

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科主催の「言語文化共同研究プロジェクト」のひとつとしてこの 8 年間進めてきた共同研究の報告書であり、そのシリーズの 8 巻目にあたる。この共同研究の基盤は、研究科の教員と院生および博士申請資格者をおもなメンバーとする定例の研究会、私たちが PCF と呼び慣わしている「ポストコロニアル・フォーメーションズ」研究会にある。この研究会はさらに、1996 年に活動を開始したカルチュラル・スタディーズの研究会 CSC（カルチュラル・スタディーズ・サークル）をその前身としている。これらの研究会のメンバーが中心となって、これまで『ポストコロニアル文学の現在』（2004 年、晃洋書房）や『英語文学の越境――ポストコロニアル/カルチュラル・スタディーズの視点から――』（2010 年、英宝者）などの書物を編集・出版してきた。

近現代のさまざまな文化の形成は、広い意味での近代植民地主義の投げかける長い影のなかで行われてきたといって間違いない。たとえば現代の「グローバル・カルチャー」、「移民文化」、「先住民文化」などもその例外ではない。これらの多様な文化の形成について考察すること、また、これらの文化に対する私たちの視座や批評をつねに形成し直すこと、それが今の私たちの研究会の命名に込められた意図である。

この研究会には、言語文化研究科の修了生など、言語文化共同研究プロジェクトの正規メンバーにはなれない仲間も多く参加しているが、これらの仲間を抜きにして、この研究会は成立しない。毎年のことながら、この報告書はその最初の読者として、まずはこれらの仲間たちに送り届けたいと思う。

2．2012 年度の PCF 活動報告

PCF はほとんどの場合、論文の批評会というかたちをとっている。それらの論文は広い意味でポストコロニアル研究と呼べるものが多いが、細分化すれば、帝国主義論、植民地文化論、ポストコロニアル文化論、移民文化論、先住民文化論、グローバリゼーション論など多種多様である。ほぼ月 1 回のペースで、土曜日の午後に開いている。基本的に、2 人の担当者がそれぞれの論文の内容を紹介し、その意義や問題点の指摘を行う。それから全体討論に入るが、多くの場合、論文を褒めそやすよりも、その欠点、盲点などが議論される。これは先行研究に対してあえて疑問を呈しながら、私たちの批評意識や批評の言葉を鍛えていく作業といえるだろう。

以下、2012 年度の PCF の記録を残しておく。開催日、論文のタイトル、担当者の順に示す。

2012 年

第 1 回　4 月 21 日（土）

1. Rahman, Md. Mamunur. “The History and Progress of the Colonized India from the Point of View of the Ruled”（伊勢芳夫）
2. Mshana, Fadhili. “Modern Makonde Sculpture: An Inquiry into the Shetani Style” *From Ritual to Modern Art: Tradition and Modernity in Tanzanian Sculpture*. Dar Es Salaam: Mkuki Na Nyokta Pub, 2001.（神田麻衣子）

第 2 回　5 月 19 日（土）

1. Williams, Raymond. “Language and the Avant-Garde” *Politics of Modernism*. London: Verso, 1989.（松本ユキ）
2. Eaton, Edith Maude. / Sui Sin Far.　“Introduction” *Mrs. Spring Fragrance*. Eds. Hsuan L. Hsu. New York: Broadview Press, 2011.（松本承子）

第 3 回　6 月 23 日（土）

1. Harris, Wilson. “Preface: The Root of Epic”, “Quetzalcoatl and The Smoking Mirror: Reflections on Originality and Tradition”, “Continuity and Discontinuity”. *Selected Essays of Wilson Harris*. Ed. A. J. M. Bundy. New York: Routledge, 1999.（古東佐知子）
2. Williams, Raymond. “Theatre as a Political Forum” *Politics of Modernism*. London: Verso, 1989.（中村未樹）

第 4 回　7 月 28 日（土）

1. Fanon, Frantz. “The Problem of the Colonized” *Toward the African Revolution: Political Essays*. New York: Grove Press, 1969.（杉浦清文）
2. Auslin, M. R. “The Style and Substance of Treaty-Making”, “Conclusion” *Negotiating with Imperialism: The Unequal Treaties and the Culture of Japanese Diplomacy*. Massachusetts: Harvard University Press, 2006.（花井唱子）

第 5 回　9 月 22 日（土）

1. Chow, R. “The Age of the World Target: Atomic Bombs, Alterity, Area Studies” *The Rey Chow Reader*. Ed. P. Bowman. New York: Columbia University Press, 2010.（山田雄三）
2. Boyarin, J. and Boyarin, D. “Introduction” *Powers of Diaspora: Two Essays on the Relevance of Jewish Culture*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2002.（加瀬佳代子）

第 6 回　11 月 4 日（日）

1. Spivak, Gayatri Chakravorty. “Will Postcolonialism Travel?” *Other Asias*. Oxford: Blackwell, 2008.　(歳岡冴香 pp.97-115.)
2. Spivak, Gayatri Chakravorty. “Will Postcolonialism Travel?” *Other Asias*. Oxford: Blackwell, 2008.　（小杉世 pp.115-131.)

第7回　12月8日（土）

1. Beck, Ulrich「真理の代わりに平和を？世界リスク社会における宗教の未来」『＜私＞だけの神－平和と暴力のはざまにある宗教』、岩波書店、2011.（村上八重子）
2. Featherstone, Simon. "Music" *Postcolonial Cultures*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2005.（木村茂雄）

2013年

第8回　1月26日（土）

1. Featherstone, Simon. "Land" *Postcolonial Cultures*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2005.（稲垣健志）
2. De Mul, Sarah. "The Holocaust as a Paradigm for the Congo Atrocities: Adam Hochschild's King Leopold's Ghost" *The Postcolonial Low Countries: Literature, Colonialism, and Multiculturalism*. Ed. Elleke Boehmer and Sarah De Mul. Maryland: Lexington Books, 2012.（井内千紗）

第9回　2月23日（土）

1. Cotton, Henry. "The Increased Bitterness of Race Feeling" *New India or India in Transition*. London: Kegan Paul Trench Trübner & Co. Ltd, 1907.（伊勢芳夫）
2. McGrath, F. C. "(De)mythology: Translations, The Communication Cord, and Field Day" *Brian Friel's (Post)Colonial Drama: Language, Illusion, and Politic*. New York: Syracuse University Press, 1999.（中村未樹）

3．ポストコロニアル・フォーメーションズ Ⅷ

この報告書には、以下に紹介する4編の論考が収められている。

伊勢芳夫の「「反復者」を再生産する社会メカニズム――「アジア解放」思想における大川周明の「忘却」――」は、同氏が今春出版した大著『「反抗者」の肖像――イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成――』（渓水社、2013年）の第3章中の一節「日本語による東アジアのマッピング――（大）アジア主義」を補足するものとして執筆された。「文化的ヘゲモニー」の維持や再生産における「反復者」と「反抗者」の役割という理論的関心を背景に、多くの面で「インド人の理解者」といえるイギリス人行政官ヘンリー・コットンの『新インド』（1907）と、神田の古本屋でたまたまこの書物に出会い、それに刺激を受けた大川周明の著作『復興亜細亜の諸問題』（1922）とを、サイード風にいうなら「対位法」的に読み解いていく。そしてコットンが、結局のところ、文化的ヘゲモニーの「反復者」を拡大再生産する制度を支持し続けていたこと、大川周明もまた、インド人たちの「内発性」の評価を怠った結果、「反復者」の再生産としての植民地政策という問題の本質を見失ってしまったことを指摘する。

松本ユキの「変わりゆく日系社会――ヒロシ・カシワギの作品に見る日系アメリカ社会――」は、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校に留学中の筆者が最近経験した、

ひとつの出会いから始まる。日系アメリカ人の二世で、俳優、詩人、そして劇作家として1940年代から活動してきた、ヒロシ・カシワギとの出会いである。本論文は、その結果実現したカシワギへのインタビューや、彼のいくつかの演劇作品を通して、第二次世界大戦の収容所の時代から現代にいたる日系アメリカ人社会の歴史を浮き彫りにしていく。それと同時に、9.11以後の日系人とアラブ系アメリカ社会との連帯や、ラテンアメリカの日系人の補償問題などに関心を寄せる現在の日系アメリカ人社会が、民族や国家の枠を超えた広がりや多様性に向かおうとしている状況を、その「現場」から報告している。

小杉世の「この世の最期のダンス？——Lemi Ponifasioの*Birds with Skymirrors*と大西洋の核文学——」も、筆者とサモア人アーティストPonifasioとの出会いとインタビューから始まる。ただし、この異色の舞踊芸術家は、小杉氏の「不器用な質問のほとんどを葬り去ってしまった」とのことだ。ダンス・パーフォーマンスを扱うこの論考は、去年の12月と今年の1月のPCFで取り上げたFeatherstoneが提起するポストコロニアル研究の課題、すなわち、その対象を文字文化だけでなく、音楽やダンスなどの領域へと広げていくという課題に対するひとつの答えといえるかもしれない。また、本論文の根底に重く横たわっているのは、第二次世界大戦以降オセアニアが経験してきた核実験、そして「フクシマ」以降の日本が直面している原発の問題への関心である。論文後半は、ニュージーランドの反核運動の歴史を振り返るとともに、井上光晴、タヒチ人作家のSpitz、マーシャル諸島で育ったアメリカ人作家Barclayによる「核文学」を取り上げ、そこからPonifasioのパーフォーマンス・アートの「意味」を逆照射していく。

はからずして、山田雄三の研究ノート「文通するニューレフトたち——1980年代の核兵器・核エネルギー問題をめぐって——」も、「フクシマ」が私たちに突きつけている核エネルギー問題から出発する。しかし本論は、同じ問題を、イギリスのニューレフト創始者のレイモンド・ウィリアムズと、1980年代の日本の「レフト」の論客であった芝田進午とが交わした核兵器廃絶に関する往復書簡という、まったく異なる光景から照らし出している。さらに、核戦争の瀬戸際まで進んだキューバ危機を題材とするジョン・サマヴィルの戯曲『人類危機の一三日間』を、芝田のセミナーに参加していた中野好夫が翻訳し、上演を可能にした経緯やその意味を説く。そして、今の私たちがこれらの問題意識を継承する（不）可能性に論及していく。

以上の4編の論考を通読しても、現在のポストコロニアル文化の形成やその研究が、民族や国民や国家などの伝統的な枠組みを超え、グローバルないし惑星的な舞台において、ますます超域化、流動化、多様化しつつあることが実感できる。読者諸氏もこれらの議論に加わり、忌憚のないコメントや意見をお寄せいただけるなら、執筆者たちにとってそれ以上の喜びはないだろう。

木村　茂雄